方言アクセントの個人差
――宮城県気仙沼市のアクセントについて――

佐　藤　亮　一

〈要旨〉

伝統的方言が衰退（共通語化）しつつある現在では、方言アクセントに個人差が少なからず認められることを宮城県気仙沼市における高年層のアクセントを中心として例示し、しかし、多人数を調査することによって、現在の段階では、伝統的方言アクセントの体系、および各語のアクセント型を推定することが可能であることを述べる。

1．はじめに

伝統的方言（明治・大正期に日本各地で話されていた共通語の影響が少ない方言）を調査するためには、外住歴の少ない高年層を対象に調査すべきであることは方言研究の基本である。

国立国語研究所編『日本言語地図』では1903年（明治36年）以前に生まれた男性を対象に調査している。『日本言語地図』は本調査期間が1957-1964年であるから、調査終了時に60歳以上の人を対象に調査したことになる。

伝統的方言を調査する際に高年層（60歳以上）を対象にすべきであることは方言研究者の常識とも言える。しかし、2012年現在の60歳は1952年（昭和27年）生まれであり、『日本言語地図』の調査終了時（1964年）では12歳である。このような「若い」世代を対象に調査して伝統的方言の特徴を正確に把握することは困難であると言わざるをえない。

アクセントは語彙や文法に比べて共通語化が遅れることは多くの調査で明らかにされているが、一方、若年層ではアクセントも共通語化が著しいことが知られている。このような現況において伝統的方言アクセントの特徴を把握することは可能であろうか。

本稿では2006年に宮城県気仙沼市で行った多人数調査の結果を資料として、高年層話者でも個人差が大きいものの、ある程度の人数を調査すれば、現段階では伝統的方言アクセントの特徴（アクセント体系および各語のアクセント型）を調査した範囲の語彙（類別語彙の一部）について把握することが可能であることを述べる。

2．調査の概要

本稿で引用する資料は2006年７月30日～８月１日に東北大学国語学研究室が宮城県気仙沼市で行った方言調査のうち、アクセント項目の調査結果である（佐藤2012）。

調査員は主として東北大学の大学院生および学部学生であるが、東北大学大学院を修了した研究者数名（筆者を含む）も調査員として調査に参加した。調査結果はすべて録音し、後日筆者が聴き取りを行った。アクセント項目の調査票は筆者が作成したものである。

2.1　話者・調査項目

話者（調査対象者）は、高年層（60歳以上）22名、中年層（40歳～59歳）16名、若年層（20歳～39歳）14名、少年層（高校生）20名、合計72名で、いずれも言語形成期（５歳～15歳）の大部分を気仙沼市で過ごした方々である。本稿ではこのうち、高年層話者の調査結果を中心に述べる。

以下に高年層話者の性別（m＝男性・ｆ＝女性）、生年（西暦の下２桁）、調査時点での年齢を年齢の大きい順（同一年齢の場合には生月の早い順）にアルファベット記号で示す。

Ａ（ｆ27年・79歳）、Ｂ（m26・78）、Ｃ（m28・77）、Ｄ（ｆ30・75）、Ｅ（m30・75）、Ｆ（m31・74）、Ｇ（m33・73）、Ｈ（m35・70）、Ｉ（ｆ38・69）、Ｊ（ｆ39・67）、Ｋ（ｆ38・67）、Ｌ（m38・67）、Ｍ（40・66）、Ｎ（m40・65）、Ｏ（ｆ41・65）、Ｐ（ｆ42・64）、Ｑ（ｆ42・64）、Ｒ（ｆ42・64）、Ｓ（m43・63）、Ｔ（m43・63）、Ｕ（m43・61）、Ｖ（ｆ45・61）

調査項目は類別語彙（金田一1974）中から次の単語（名詞）を選んだ。

１拍名詞：血・戸＝第１類、木・手＝第３類

２拍名詞：風・酒＝第１類、石・胸＝第２類、足・犬＝第３類、糸・稲・海・数・肩＝第４類、秋・汗・窓・猿＝第５類

３拍名詞：桜・煙＝「形」類、頭・鏡・刀・仏・男・団扇・鋏＝「頭」類、朝日・胡瓜・心・姿・涙・枕・油・柱・紅葉（もみじ）＝「命」類、兎・狐・雀・背中・鼠・蚯蚓（みみず）＝「兎」類、苺・薬・鯨・便り・後ろ・卵＝「兜」類

2.2 調査方法

調査は次の２種類の方法を用いた。

〈方法１〉（本稿では「方言的発話」と呼ぶことにする）

調査員による以下の指示・説明のもとに、調査語を冒頭においた短文（助詞なし）を発音してもらう。

〈これから気仙沼のことばの調子についておたずねします。次のことばを気仙沼の発音で読んでください。たとえば、「肩　痛い」は「カダ　イデ」のように。（「そのようには発音しない」と言われたら、「ふだん地元の友達と話すときの発音でお願いします」〉

例：「血　出た」「手　洗う」「風　吹く」「桜　咲いた」など。

〈方法２〉（本稿では「共通語的発話」と呼ぶことにする）

調査員による〈次の文を自然な調子で読んでみてください〉という指示のもとに、調査語を冒頭においた短文（助詞つき）を読んでもらう。

例：「血が出た」「手を洗う」「風が吹く」「桜が咲いた」など。

東北地方の方言では格助詞の「が」や「を」は使用しない。そのため、「が」「を」をつけた短文を読んでもらうと、アクセントの使い分け能力がある世代（中年層以下に多い）では、ふだん話している方言アクセントではなく、共通語アクセントが現れる傾向がある（佐藤2005）。そこで、ふだん話している方言アクセントを得ると同時に、アクセントの使い分けの程度をも調査する目的で、この２種類の方法を用いた。

３．調査結果

3.1 調査結果の表示

以下の記述において、調査結果はアクセント核の位置を数字で示す。

１拍名詞の場合、０型は、「方言的発話」では「チーデ$\overline{ダ}$」（血　出た）、「トーシメ$\overline{ル}$」（戸　閉める）のように、また、「共通語的発話」では「チガデ$\overline{タ}$」、「トーシメ$\overline{ル}$」のように、調査語を低い音調（○）で発音したものである。１型は、「方言的発話」では「$\overline{キー}$キ$\overline{ル}$」（または「$\overline{キ}$ーキ$\overline{ル}$」）（木　切る）、「$\overline{テー}$アラ$\overline{ウ}$」（または「$\overline{テ}$ーアラ$\overline{ウ}$」）（手洗う）のように、「共通語的発話」では「$\overline{キ}$オキ$\overline{ル}$」「$\overline{テ}$オアラ$\overline{ウ}$」のように、調査語を高い音調（●）で発音したものである。

２拍名詞の場合、０型は、「方言的発話」では「サゲノ$\overline{ム}$」（酒　飲む）のように、「共通語的発話」では「サケオノ$\overline{ム}$」のように、調査語を低い音調（○○）で発音したものである。１型は、「方言的発話」「共通語的発話」とも調査語の第１拍目を［●○］のように高い音調で発音したものである。２型は、「方言的発話」では「イ$\overline{ネ}$ミ$\overline{ノ}$ル」（稲

実る）のように、調査語の第２拍目を［○●］のように高い音調で発音し、、共通語的発話では「イネガミノル」のように、調査語を含む文節を［○●▽］（低高低）と発音したものである。

３拍名詞の場合、０型は方言的発話では「サクラサイダ」のように、共通語的発話では「サクラガサイタ」のように、調査語を低い音調（○○○）で発音したものである。２型は「方言的発話」「共通語的発話」とも、調査語を［○●○］（低高低）と発音したものである（ただし、「胡瓜」は［キューリ］●●○）。３型は、「方言的発話」では調査語を［○○●］、「共通語的発話」では調査語を含む文節を［○○●▽］（稀に［○●●▽］）と発音したものである。１型は「方言的発話」「共通語的発話」とも調査語を［●○○］と発音したものである。

3.2　個々の話者のアクセント型

3.2.1　伝統的アクセント型の保持者

最初に気仙沼市方言の伝統的アクセント型をほぼ保持していると推定される話者５名（Ｂ・Ｎ・Ｔ・Ｕ・Ｖ）が発音したアクセント型を示す。

１拍名詞：０型＝血・戸、１型＝木・手

２拍名詞：０型＝風・酒・石・胸、２型＝足・犬・稲・海・数・肩・秋・汗・窓・猿

３拍名詞：０型＝桜・煙、２型＝朝日・胡瓜・紅葉・兎・狐・雀・背中・鼠・蚯蚓・苺・薬・鯨・便り・卵、３型＝頭・鏡・刀・仏・男・団扇・鋏・心・姿・涙・枕・油・柱・後ろ

以上は「方言的発話」ではＢＮＴＵＶが同じ型であった。なお、「後ろ」は「方言的発話」ではＮとＴが［ウッショムク］（後ろ向く）と発音した。「共通語的発話」では、話者Ｎが「桜」を３型、Ｂが「後ろ」を２型、Ｕが「朝日」「兎」「狐」を３型という伝統的アクセント型から逸脱したアクセント型で発音した。

以上のように、気仙沼市方言の伝統的アクセントは、１拍名詞は１類が０型、３類が１型、２拍名詞は１類と２類が０型、３・４・５類が２型、３拍名詞は「形」類が０型、「頭」類が３型、「命」類は「朝日」「胡瓜」「紅葉」以外が３型、「兎」類と「兜」類は「後ろ」以外が２型であることが分かる。

ただし、次に述べるように、気仙沼市のアクセントは高年層でもかなりの個人差が認められるから、話者ＢＮＴＵＶを調査した段階では、３者のアクセント型がすべて伝統的アクセント型であると断定することはできない。話者ＢＮＴＵＶがほぼ伝統的アクセント型を保持していると判断できるのは、表１～３に示したように22名の話者のアクセ

ント型を総合的に考察した結果であることに注意したい。

3.2.2 非伝統的アクセント型が少し見られた話者

次に、伝統的アクセントからやや逸脱したアクセント型を示した話者の逸脱型を示す(以下の例はすべて「方言的発話」の結果である)。

話者A：0型＝朝日・心・姿・枕・油・柱・便り・後ろ

話者C：0型＝便り

話者D：2型＝頭・鏡・刀・仏・心・姿、0型＝足、1型＝糸

話者E：2型＝頭・心、3型＝朝日

話者F：2型＝心・柱、0型＝枕・背中

話者G：3型＝煙

話者H：0型＝木　3型＝朝日

話者I：2型＝心、0型＝油

話者J：0型＝枕・苺

話者O：0型＝便り

話者Q：1型＝酒・石

話者R：2型＝鋏・後ろ

話者S：3型＝朝日

上の例に見られるように逸脱型を示した語は3拍名詞に多い。その中で逸脱型が見られた単語は「心」が5例、「朝日」「便り」が3例、「頭」「姿」「枕」「油」「柱」「後ろ」が2例、「煙」「鏡」「鋏」「涙」「背中」が1例であり、「桜」「男」「団扇」「胡瓜」「紅葉」「兎」「狐」「雀」「鼠」「蚯蚓」「苺」「薬」「鯨」「卵」の語には逸脱型が認められなかった。これらの話者を調査した段階では、伝統的アクセント型をすべての調査語について確定することはできないことになる。

3.2.3 無型アクセント的な姿を示した話者

次に22名の高年層話者のうち、かなり無型アクセント（無アクセント）的な姿を示した3名の話者（PLK）のアクセントについて述べる。

話者P（64歳女性・18～17歳は宮城県鳴子、父親は気仙沼市・母親は鳴子出身）は、「方言的発話」「共通語的発話」とも、1拍名詞を除いてきわめて無型的であった。具体的には以下のとおり。

〈方言的発話〉

１拍名詞：０型＝血・戸　１型＝木・手

２拍名詞：０型＝足　「足」以外の単語ははすべて１型［●○］

３拍名詞：０型＝桜・煙・頭・鏡　それ以外はすべて２型［○●○］

〈共通語的発話〉

１拍名詞：０型＝血・戸　１型＝木・手

２拍名詞：１型＝秋　それ以外はすべて２型［○●▽］

３拍名詞：０型＝桜　それ以外はすべて２型［○●○▽］

話者Ｌ（67歳男性・気仙沼市以外の居住歴なし。両親とも気仙沼市出身）は、「方言的発話」ではどの拍数についてもきわめて無型的であった。「共通語的発話」ではある程度型の対立が認められたが、その多くは伝統的アクセント型から逸脱しており、逸脱しているアクセント型は必ずしも共通語アクセント型ではなかった（つまり、共通語化しつつあるわけでもなかった）。具体的には以下のとおり。

〈方言的発話〉

１拍名詞：すべて０型［○］

２拍名詞：すべて０型［○○］

３拍名詞：２型＝朝日・胡瓜・紅葉・兎・卵。それ以外はすべて０型［○○○］。

〈共通語的発話〉

（以下、「※」は非方言かつ非共通語アクセント型、「共」は非方言かつ共通語アクセント型。なお、共通語アクセント型については表６参照）

１拍名詞：０型＝血・戸・手（※）　１型＝木

２拍名詞：０型＝風・酒・石・胸・足（※）・数（※）・肩（※）・窓（※）

２型＝犬・糸・稲・海・秋・汗・猿

３拍名詞：０型＝桜・煙・団扇（※）・心（※）・姿（※）・枕（※）・柱（共）・兎（共）

２型＝朝日・胡瓜・涙（※）・紅葉・狐・雀・背中・鼠・蚯蚓・苺・薬・鯨・便り・卵

３型＝頭・鏡・刀・仏・男・鋏・油・後ろ

この話者の場合、「共通語的発話」では３拍名詞の２型と３型に伝統的アクセント型が多く見られる。

話者Ｋ（67歳女性・気仙沼市以外の居住歴なし。両親とも気仙沼市出身）は、「方言的発話」では無型アクセント的であったが、「共通語的発話」では、かなり伝統的方言アクセント型を示した。

〈方言的発話〉

1拍名詞：1型＝血（※）・戸（※）・木・手。0型＝なし。

2拍名詞：1型＝風（※）酒（※）・石（※）・胸（※）・足（※）・犬（※）・糸（共）・稲（共）・稲（共）・海（共）・数（共）・肩（共）・秋（共）・汗（共）・窓（共）・猿（共）。0型＝なし。2型＝なし。

3拍名詞：0型＝煙・油（共）・便り（※）・後ろ（共）

2型＝桜（※）・頭（※）・鏡（※）・刀（※）・男（※）・朝日・胡瓜・心（共）・姿（※）・柱（※）・紅葉・兎・雀・背中・鼠・蚯蚓・苺・薬・鯨・卵

3型＝団扇・鋏

〈共通語的発話〉

1拍名詞：1型＝血（※）・戸（※）・木・手。0型＝なし。

2拍名詞：0型＝風・酒　2型＝石（共）・胸（共）・足・犬・糸・稲・糸・海・数・肩・秋・汗・窓・猿

3拍名詞：0型＝桜・煙・仏（共）

2型＝鏡（※）・朝日・胡瓜・姿（※）・涙（※）・紅葉・兎・狐・雀・背中・鼠・蚯蚓・苺・薬・鯨・便り・後ろ・卵

3型＝頭・刀・男・団扇・鋏・心・枕・油・柱

この話者は1拍名詞は「方言的発話」「共通語的発話」とも1型で型の対立がない。2拍名詞は「方言的発話」ではすべて1型であるが、「共通語的発話」では「石」と「胸」を除いて方言アクセント型である。3拍名詞は「方言的発話」では2型に収斂する傾向（すなわち無型化の傾向）が見られるが、「共通語的発話」では伝統的方言型である3型が増加している。

3.2.4　特異なアクセントを示した話者

最後に22名の高年層話者の中でかなり特異な姿を見せた話者Mのアクセントについて記す。

話者M（63歳男性・18～20歳東京、20歳～24歳福島。両親とも気仙沼出身）は「方言的発話」ではやや無型アクセント的（見方によっては共通語アクセント的）、「共通語的発話」では方言アクセント的であった。

〈方言的発話〉

1拍名詞：0型＝血・戸　1型＝木・手

2拍名詞：0型＝風・酒・胸・犬（※）・汗（※）

１型＝石（※）・足（※）・糸（共）・稲（共）・海（共）・数（共）・秋（共）・窓（共）・猿（共）

３拍名詞：０型＝桜・煙・頭（※）・鏡（※）・刀（※）・仏（共）・男（※）・団扇（※）鋏（※）・朝日（※）・心（※）・姿（※）・枕（※）・柱（共）・背中（共）・便り（※）・後ろ（共）

２型＝胡瓜・油（※）・紅葉・雀・鼠・蚯蚓・苺・薬・鯨・卵

３型＝涙

この話者は「方言的発話」では１拍名詞は型の対立が方言アクセントと同じ（共通語とも同じ）、２拍名詞は１型が多く無型アクセント的のように見えるが、その大部分は４類・５類の語なので、共通語化とも考えられる。３拍名詞は０型が多く、その点では無型的であるが、「仏」「柱」「背中」「後ろ」は共通語アクセント型である。２型には方言アクセント型と一致する語が多い。伝統的方言に多い３型はほとんど見られない。すなわち、この話者の「方言的発話」のアクセントは一部が共通語化し、一部は「非方言・非共通語型」に逸脱していると言える。この話者が18～20歳に東京に、20～24歳に無型アクセント地域である福島に住んだことが影響しているのであろうか。次にこの話者の「共通語的発話」の結果を記す。

〈共通語的発話〉

１拍名詞：０型＝血・手　１型＝木・手

２拍名詞：０型＝風・酒・石・胸　２型＝足・犬・糸・稲・海・数・肩・汗・窓・猿　１型＝秋（共）

３拍名詞：０型＝桜・煙　２型＝朝日・胡瓜・紅葉・兎・狐・雀・背中・鼠・蚯蚓・苺・薬・卵　３型＝頭・鏡・刀・仏・男・団扇・鋏・心・姿・涙・枕・油・柱・便り（※）・後ろ

この話者は「共通語的発話」では「秋」と「便り」を除いてすべて方言アクセント型に発音している。「方言的発話」よりも「共通語的発話」の方に伝統的アクセント型が多く出現するという結果（この傾向は話者Ｌと話者Ｋにも見られた）は筆者の過去の調査（佐藤2005）と矛盾する。その要因についての考察は今後の課題としたい。

3.3　高年層話者全体の傾向

以上のように、気仙沼市方言アクセントにはかなりの個人差が認められる。したがって、数名の話者を調査した段階では、伝統的方言アクセントの型をすべての調査単語について確定することは困難である。居住歴などに問題がない高年層話者であっても無型

アクセント的な姿を示す話者も存在する（高年層話者に無型アクセント的な姿を示す話者が少なからず見られる理由の解明は今後の課題であり、佐藤2011ではその要因について複数の仮説を述べた）。

表１～３は、１拍名詞・２拍名詞・３拍名詞のそれぞれの単語について、発話総数（原則として22であるが、同じ単語を複数回発音した場合もある）に対する各型に発音した割合を％で示したものである。点線の左側は「方言的発話」、右側は「共通語的発話」の結果である。なお、％は小数点以下を四捨五入したものであり、そのため、場合によっては合計が100％をわずかに（１％以内の範囲で）増減する場合がある。

また、それぞれの語について、最も多く発音した型を太字で示した。

表１～３で示した太字の部分の型は大多数の話者が発音したアクセント型であり、この型が伝統的気仙沼市方言のそれぞれの語のアクセント型であると推定される。

高年層話者の場合、「方言的発話」と「共通語的発話」の数値に大きな差は見られないが、全体的に見て「共通語的発話」（名詞に助詞を付けた短文を発音した場合）の方に伝統的アクセント型がやや多く出現する傾向が認められる。その要因については、一部の話者（無型アクセント的傾向の話者や特異な姿を示した話者）の結果が反映した可

表１　高年層・１拍名詞

	０型		１型	
血	**95**	**95**	5	5
戸	**95**	**90**	5	10
木	9	0	**91**	**100**
手	9	5	**91**	**95**

表２　高年層・２拍名詞

	０型		１型		２型	
風	**91**	**90**	9	5	0	5
酒	**86**	**90**	14	5	0	5
石	**86**	**86**	14	5	0	10
胸	**86**	**71**	14	14	0	14
足	9	10	9	5	**82**	**86**
犬	9	0	9	0	**82**	**100**
糸	9	0	18	5	**73**	**95**
稲	5	0	14	0	**82**	**100**
海	5	0	14	0	**82**	**100**
数	5	10	14	0	**82**	**90**
肩	5	5	14	0	**82**	**95**
秋	5	0	14	10	**82**	**90**
汗	5	0	14	0	**82**	**100**
窓	5	5	14	0	**82**	**95**
猿	5	0	14	10	**82**	**90**

表３　高年層・３拍名詞

	０型		１型		２型		３型	
桜	**95**	**86**	0	0	5	0	0	14
煙	**95**	**90**	0	0	0	5	5	5
頭	14	5	0	0	14	10	**73**	**86**
鏡	14	0	0	0	9	14	**77**	**86**
刀	9	0	0	0	14	14	**77**	**86**
仏	9	5	0	0	14	10	**77**	**86**
男	9	0	0	0	9	10	**82**	**90**
団扇	9	5	0	0	5	14	**86**	**81**
鋏	14	5	0	0	9	14	**77**	**81**
朝日	9	5	0	0	**77**	**76**	14	19
胡瓜	0	0	0	0	**100**	**100**	0	0
心	14	5	0	0	27	14	**59**	**81**
姿	14	5	0	0	9	33	**77**	**62**
涙	9	0	0	0	9	38	**82**	**62**
枕	23	10	0	0	9	14	**68**	**76**
油	18	5	0	0	9	14	**73**	**81**
柱	3	10	0	0	14	14	**73**	**76**
紅葉	5	0	0	0	**95**	**100**	0	0
兎	5	14	0	0	**95**	**81**	0	5
狐	5	10	0	5	**91**	**71**	5	14
雀	5	0	0	0	**95**	**100**	0	0
背中	14	0	0	0	**86**	**100**	0	0
鼠	5	0	0	0	**95**	**100**	0	0
蚯蚓	5	10	0	0	**95**	**90**	0	0
苺	9	0	0	0	**91**	**100**	0	0
薬	5	5	0	0	**95**	**95**	0	0
鯨	5	10	0	0	**95**	**86**	0	5
便り	24	14	0	0	**76**	**82**	0	5
後ろ	19	5	0	0	10	27	**71**	**68**
卵	0	5	0	0	**100**	**95**	0	0

能性と、調査法に問題がある可能性の両方が考えられ、今後の検討課題としたい。

一方、表６などに示した若い世代の場合には「共通語的発話」の方に共通語アクセント型が多く出現する傾向が顕著である（表６の「朝日」「胡瓜」「姿」「涙」「枕」「油」「紅葉」「兎」「狐」「雀」「背中」「鼠」「蚯蚓」「苺」「薬」「鯨」「便り」「後ろ」「卵」）。なお、「苺」「卵」などは東京アクセントに世代差が見られるが、気仙沼市の高校生は（当然ながら）東京の若い世代のアクセント型にシフトしている。

3.4　中年層・若年層・少年層のアクセント（３拍名詞）

表４・表５・表６に中年層・若年層・少年層（高校生）の３拍名詞のアクセント型を示した。中年層は高年層と同じ伝統的型をある程度保持しているが、若年層以下では共通語化が進み、伝統的アクセント型が大きく衰退していることが読み取れる。

表６では、少年層の調査結果とともに、「共」の欄に共通語アクセント型を（注）、「方」の欄に、高年層の調査結果から推定される、この地域の方言アクセント型を記した（「共」の欄に複数の数字がある場合には、左側が高年層が使用している古いアクセント型、右側が若年層が使用している新しい型である）。

４．おわりに

以上、気仙沼市の高年層22名を対象に調査した結果にもとづいて、アクセント型の個人差について記し、複数の話者を調査することによってこの地域の伝統的方言アクセントの型を推定することが可能であることを述べた。このことは、別の言い方をすれば、１名ないし数名の話者を対象にして調査した場合には、伝統的方言アクセントを正確には把握できない場合があることを意味している。

また、この調査結果から、共通語化が著しい今日でも、2006年の段階で60歳以上の高年層（1946年・昭和21年以前に生まれた人）を多数調査すれば、アクセントについては伝統的方言の特徴をかなり正確に把握できると考えられる。さらに、2006年の段階で40歳以上の中年層（1966年・昭和41年以前に生まれた人）でも多人数調査によって伝統的方言の特徴をある程度把握することが可能であることを示唆している。馬瀬良雄1981が指摘しているように、幼児期にテレビが存在しなかった時期に生まれた世代が比較的伝統的方言アクセントを保持しているのかもしれない。

しかし、これは限られた地方で少数のアクセント語彙を調査した結果であるから、全国各地の伝統的方言の全容を把握する方法やその限界については、さらなる調査研究を行うことが緊急の課題である。

表４　中年層・３拍名詞

	０型		１型		２型		３型	
桜	100	100	0	0	0	0	0	0
煙	100	100	0	0	0	0	0	0
頭	25	25	0	0	6	0	69	75
鏡	19	6	0	0	0	6	81	88
刀	19	6	0	0	0	0	81	94
仏	13	13	0	0	6	0	81	88
男	6	6	0	0	0	0	94	94
団扇	19	13	0	0	0	0	81	88
鋏	13	0	0	0	6	19	81	81
朝日	0	0	6	13	88	88	6	0
胡瓜	0	0	6	6	94	94	0	0
心	19	13	0	0	19	6	63	81
姿	6	0	6	13	56	81	31	6
涙	19	19	6	6	25	31	50	44
枕	25	19	0	0	13	19	63	63
油	25	38	0	0	13	13	63	50
柱	25	38	0	0	0	6	75	56
紅葉	6	0	6	19	88	75	0	6
兎	19	25	0	0	81	69	0	6
狐	13	19	0	0	88	69	0	13
雀	25	19	0	0	75	69	0	13
背中	19	25	0	0	81	75	0	0
鼠	6	13	0	0	94	81	0	6
蚯蚓	6	6	0	0	94	94	0	0
苺	19	31	0	0	81	63	0	6
薬	6	13	0	0	94	88	0	0
鯨	44	31	0	0	50	44	6	25
便り	6	13	6	13	81	69	6	6
後ろ	25	25	0	0	6	6	69	69
卵	6	19	0	0	94	81	0	0

表５　若年層・３拍名詞

	０型		１型		２型		３型	
桜	**100**	**100**	0	0	0	0	0	0
煙	**100**	**100**	0	0	0	0	0	0
頭	0	7	0	0	6	0	**69**	**93**
鏡	7	0	0	0	0	0	**93**	**100**
刀	14	7	0	0	0	0	**86**	**93**
仏	29	43	0	0	0	0	**71**	**57**
男	0	7	0	0	0	0	**100**	**93**
団扇	21	15	0	0	21	0	**57**	**85**
鋏	7	14	0	0	7	0	**86**	**86**
朝日	0	7	14	**50**	**79**	43	7	0
胡瓜	0	0	14	29	**86**	**71**	0	0
心	7	14	0	0	0	0	**93**	**86**
姿	0	**43**	21	29	**50**	29	29	0
涙	7	**36**	14	29	29	7	**50**	29
枕	0	14	7	21	21	14	**71**	**50**
油	14	38	0	0	0	0	**86**	**62**
柱	0	0	0	0	0	0	**100**	**100**
紅葉	0	0	27	**57**	**60**	36	13	7
兎	**50**	**64**	0	0	36	14	14	21
狐	36	**57**	0	0	**43**	21	21	21
雀	36	**57**	0	0	**43**	29	21	14
背中	14	**57**	0	0	**71**	14	14	29
鼠	43	**64**	0	0	**50**	14	7	21
蚯蚓	13	**50**	0	0	**67**	29	20	21
苺	29	**71**	0	0	**64**	7	7	21
薬	29	**50**	0	0	**64**	29	7	21
鯨	**71**	**93**	0	0	14	0	14	7
便り	0	0	**36**	**57**	**36**	43	29	0
後ろ	21	**57**	0	0	7	0	**71**	43
卵	0	0	0	0	**86**	**93**	14	7

表６　少年層・３拍名詞

	０型		１型		２型		３型		共	方
桜	**90**	**100**	0	0	10	0	0	0	0	0
煙	**95**	**100**	0	0	5	0	0	0	0	0
頭	10	0	0	0	5	0	**85**	**100**	23	3
鏡	15	5	0	0	10	5	**75**	**90**	3	3
刀	25	10	0	0	0	0	**75**	**90**	23	3
仏	40	**60**	0	0	0	0	**60**	40	03	3
男	20	5	0	0	0	0	**80**	**95**	3	3
団扇	**50**	**50**	0	0	5	5	45	45	2	3
鋏	5	5	0	0	25	10	**70**	**85**	3	3
朝日	0	0	**50**	**90**	50	10	0	0	1	2
胡瓜	0	10	0	35	**100**	**55**	0	0	1	2
心	40	15	0	0	0	0	**60**	**85**	23	3
姿	0	10	**50**	**80**	**50**	5	0	5	1	3
涙	0	10	35	**84**	**60**	0	5	5	1	3
枕	20	15	25	**50**	25	10	**30**	25	1	3
油	**50**	**75**	0	0	5	0	45	25	0	3
柱	30	25	0	0	5	0	**65**	**75**	03	3
紅葉	0	0	**50**	**95**	45	5	5	0	1	2
兎	**80**	**95**	0	0	15	0	5	5	0	2
狐	**63**	**95**	5	0	32	0	0	5	0	2
雀	**60**	**89**	0	0	30	0	10	11	0	2
背中	**70**	**95**	0	0	30	5	0	0	0	2
鼠	**70**	**90**	0	5	30	5	0	0	0	2
蜥蜴	**75**	**95**	0	5	25	0	0	0	0	2
苺	**70**	**80**	0	20	20	0	10	0	10	2
薬	**50**	**85**	0	5	45	5	5	5	0	2
鯨	**70**	**95**	0	5	20	0	10	0	0	2
便り	10	15	**40**	**75**	**40**	5	10	5	1	2
後ろ	**60**	**90**	0	5	10	0	30	5	0	3
卵	10	0	0	0	**86**	**100**	5	0	02	2

注

本稿で「共通語アクセント」としたアクセント型は、すべて『新明解国語辞典・第六版』(2009)記載のものである。この辞典は、規範としての標準アクセントではなく、現代東京語(若年層を含む)のアクセントを記載している。

文献

金田一春彦(1974)『国語アクセントの史的研究』塙書房

佐藤亮一(2005)「アクセント調査における「読ませる調査」と「言わせる調査」」佐藤喜代治博士追悼論集刊行会編『日本語学の蓄積と展望』明治書院

佐藤亮一(2011)「アクセント」小林隆編『宮城県・山形県陸羽東線沿線地域方言の研究』東北大学国語学研究室

佐藤亮一(2012)「アクセント―気仙沼市―」小林隆編『宮城県・岩手県三陸地方南部地域方言の研究』東北大学国語学研究室

馬瀬良雄(1981)「言語形成に及ぼすテレビおよび都市言語の影響」『国語学125』

山田忠雄主幹(2009)『新明解国語辞典・第六版』三省堂

付記

本稿で調査した気仙沼市は2011年3月11日の大地震・大津波で大きな被害を受けました。お世話になった話者の方々の中には震災によって亡くなった方々が含まれており、家を失った方々も多くいらっしゃいます。調査にご協力くださった方々にお礼を申し上げるとともに、心よりお悔やみ、お見舞いを申し上げます。

宮坂覚先生には、筆者のフェリス女学院大学在任中、多大のご指導をいただきました。深く感謝申し上げます。

(本学名誉教授)